

わたしたちの教室はどれほど異性愛規範的か？

アシュリー・ラッセル・ムーア Ashley Russell Moore

ボストン大学言語リテラシー教育研究科助教授

(翻訳：山本 大 ブリティッシュコロニア大学・言語リテラシー教育研究科・博士課程)

わたしたちの教室は“普通”とされる性規範の外側に生きる学習者たちにとってどれほど安心感があり、また包摂的でしょうか。別の言い方をすれば、わたしたちの教室はどれほど「ヘテロノーマティブ（異性愛規範的）」でしょうか。本稿では日本の英語教育を異性愛規範の観点から論じ、包摂のためのアイディアと指針を提示します。

わたしたちの日常・英語教室に潜む異性愛規範

「異性愛規範（heteronormativity）」とは、異性愛が人間の恋愛関係や性的関係の唯一または最良のパターンであると主張する考え方です。メディアや世論などを通じ、異性愛が「普通」で望ましいという信号をわたしたちは絶えず受信し続けています。多くのクィア（queer）の人々、つまり異性愛の外側に恋愛や家族関係を経験する人々にとって、異性愛規範は抑圧の一形態であり、自身の望む、または置かれた関係性、願望、家族の在り方を劣ったものとする通念です。

では、教室で使う教科書、教材、そしてやりとりにおいて、生徒たちはどのような性規範に触れているでしょうか。

Canale and Fernández Fasciolo (2022), Gray (2013), Paiz (2015)などの研究は、異性愛規範の外側に存在する性的アイデンティティや関係性は、英語の教科書中でほとんど表象されていなかったと報告しています。Moore (2020) は言語学習教材に潜む多様な異性愛規範を分類し、こうした異性愛規範的抹消（heteronormative erasure）は最も抑圧的な性規範の一形態であると主張しています。クィアの学習者たちは、異性愛規範的抹消に起因する教室内でのクィアに対する沈黙（silencing）

を敏感に感じ取ることがあるからです（Moore et al., in press）。

教室内でクィアの在り方を沈黙させることはさらなる問題をはらみます。学習者はしばしば教室環境下において、自身の生活をもとに表現活動をすることを強いられるからです。Liddicoat (2009) の教室研究では、女性の学生が理想のパートナーを“she”と描写した際、それが自身の性的アイデンティティに基づく正確な表現であっても、教師がそれを言語形式的な「学習者エラー」として扱ってしまった事例を描写しています。

これらの研究結果に思い当たる点があるならば、みなさんの教室が異性愛規範を助長する場として作用てしまっている可能性があると言えます。

ひろがるクィア包摂

2024年度から小学校教科書で LGBT+ に関する記述が増えるとの報道のとおり（時事通信）、国内の教育カリキュラムの中にも LGBT+ を肯定する内容を含める動きが出てきています。一方で、性をめぐる事柄は保健体育（新しくは社会科、道徳）で扱えば十分で、英語教育で扱うことに難色を示す声もあるでしょう。しかし、LGBT+ に肯定的な内容は上記教科・科目と同じくらい英語においても重要です。以下では、こうしたクィアを包摂・肯定する英語授業実践に関する懸念や疑問の例を挙げて解きほぐします。

「わたしの仕事は英語を教えることであって、性に関してではありません」——上述の通り、言語学習者は日々の生活から多くの学習内容を得ています。したがって、クィアの学習者が自身の人生を表現するために必要な言語的資源にアクセス



できることが重要です。セクシュアリティに関わらず、すべての学習者がクィアの問題について、他者尊重の姿勢で英語でコミュニケーションをする力を養う機会が提供される必要があります。英語教師が家族や人間関係に関わる内容を取り扱う以上、その過程で、常に異性愛規範を教えているのだと認識することが重要です。異性愛規範は無標準化された規範であり、わたしたちはこうした偏りを認識できていないにすぎません（ただし、すべてのクィアの学習者が自身のアイデンティティを教室内で共有することを望んでいるとは限らない点に留意が必要です）。

「わたしの教室にクィアの学習者はいません」——クィアの人々の存在は、社会の重要かつ不可避の側面です。したがって、たとえ自身の教室に当事者が存在せざとも、学習者たちが他者尊重の姿勢を持って英語使用の場に参加するためには、クィアに関するテーマを取り入れる必要があるでしょう。また、統計的に、クィアの人々はすべての教室に存在すると考えるのが妥当です。

「教師として間違いを犯すのではと心配です」——これは一般的かつ真っ当な懸念であり、有用なためらいであると言えます。無思慮に行動するよりも、十分な注意を払って行動する方が良いからです。しかし、英語教師として学習者たちの社会参加を支援することがわたしたちの責務である以上、躊躇したままではいられません。間違いは避けて通れませんが、近年ではクィア包摶的・肯定的な授業実践を目指す上で有用な資料が出版されており、変容のための指針となるはずです。何より、クィアの学習者たちはこうした変化を見るまでにあまりにも長く待たされ続けてきました。

クィア包摶を目指す教室実践への提言

では、わたしたち英語教師ひとりひとりにできることはなんでしょうか。

1. 教室内実践を異性愛規範の観点から精査する——第一歩として、教室実践の中で異性愛規範（暗に、また意図せず）助長するメッセージを發していないか精査することが挙げられます。わたしたちが日々接する教材には、どのような家族や人間関係が取り上げられているでしょうか。クィアの学習者にとって、心理的負担の大きい教室内タ

スクはどのようなものでしょうか。こうした問いは、教材・教室実践内に潜む異性愛規範への気づきを促し、内省的実践、そして具体的な改善への指針を示すでしょう。

2. クィアの英語使用者の言語実践を学ぶ——言語の本質は、時の流れとともに移り変わりながら、動的で多様な言語使用者のニーズを満たすという点にあります。英語教材の多くは異性愛規範的傾向があり、クィアの英語使用者の言語実践を反映した教科書を見つけることは非常に困難です。しかし、例えば *Teen Vogue* など若年層向け刊行物は、現代の性に対する考え方を理解する上で有用な資源となるでしょう（QR コード参照）。

3. クィア包摶を意識的に促進する——国内の教育制度中に光明が見られる一方、英語教科書・教材が真のクィア包摶に近づくには時間がかかるかもしれません。これは、今日求められる変化の担い手としての教師の責務を指し示します。例えば、教材中にクィアの人々の存在が著しく欠けている際、こうした問題を学習者に指摘する（あるいは共に考える）ことができるでしょう。また、クィアの存在やことばを意識的に表象させることも可能です。

4. 意識改革を迫ったり議論をするのではなく、クィアの普通化を目指す——残念ながら、世界には未だ多くの同性愛差別が存在します。クィアを包摶する授業が学習者たちへの意見の押し付けになるのではという懸念もあるでしょう。しかし、ここで重要なのは、同性愛差別的な学習者の考えを変えようとする試みは絶対に避けるべきだということです。同様に、クィアの尊厳と権利についてディベートをしたり、意見を強制することも避けるべきです。代わりに、クィアの人々とその生活に日常の一部として触れられるよう取り組むことがスタートとなるでしょう。たとえば、学習者たちが日々接するクィアの人々（著名人など）に意識を向けることなどができます。これを「普通化アプローチ」と呼びます。

* * *

読者の皆様が各自の教室でこれらを含む様々なアプローチを試み、クィア包摶を目指す教室実践の成果や課題などを共有してくださることを望んで止みません。